

チョン・セラ著 斎藤真理子訳 「フィフティ・ピープル」 亜紀書房 について
2023年3月24日 読書会 担当：岡田千重

○この本を選んだ経緯

韓国。

近くて遠い国だと思っていました。日本と韓国のあいだには、歴史や政治や儒教思想や家父長的伝統など…さまざまなものによって形づくられた越えがたい溝があると。

ところが。

気づけば、周囲には何の違和感も無く軽々と溝をこえていく人々が数多くいて、韓流ドラマやK-POPやアイドルに夢中になったり、美容やメイクを積極的に取り入れたりしているではありませんか。

いつの間に近くて近い国になったの？いかにして近づいたの？

私は文学から韓国の人々に近づきたいと願い、できるだけ最近の作品を探しました。現在の人々の生活や思いに触れたいと思ったのです。

○岡田の読後感想

そして出会った「フィフティ・ピープル」は、2016年に、まず出版社のウェブサイトの連載として発表され、次いで単行本にまとめられた短編集です。一章一章が短くて読みやすいのはそんな誕生経緯があるからでしょうか。400頁を超えるボリュームですが負担には感じませんでした。日本語版は2018年に出版されました。物語には韓国で実際に起きた事件が数多く反映されており、訳者あとがきの詳しい解説が理解の助けになりました。

構成がユニークです。短編集といいましたが、50の物語が少しずつ重なり合い、つながり、絡み合い、一つの物語世界となって立ち上がってくるのです。特定の主人公のいない、映画でいうところの「グランドホテル形式」です。それぞれの人生を背負った人々が出会い、別れ、すれちがう…時につらい情況も簡潔に、一種軽妙に、語られて物語は進みます。

登場人物の数はとても多く、彼らは他の章のあちこちに顔を出します。時には本当に影のようにちらりと。(本の末尾にはご丁寧にも読者自身が書き込むための人名索引がついています。)思いがけないところでつながりが明らかになったり、同じ出来事を別の視点で見たり。おなじみの人に再会するとなんだか楽しい気分になりました。(相関図をかきながら読み進めるとさらに楽しいです)

ほんとうに様々な人がいます。人生の師と仰ぎたい老教授。肩を抱いて慰めたい(でもきっと一緒に泣くことしかできないでしょう)母親。応援したくなる若者。映画談義をしてみたい人。韓国社会を他者としての目で見ている人。恋が始まる二人。……

彼らは日本とは異なる風土や風習や制度の中に生きていますが、今、となりにいたとしても違和感の無い人たちばかりです。同じように悩みながら生きている人たちです。

どなたも、物語を読み進めるうちに、行き交う人々の誰かに共感できるのではないのでしょうか。

読み終わったとき、私にも、韓国は近しい国となっていました。

○読書会にて

人生経験豊富な諸先輩方に、この一風変わった作品が受け入れられるのか不安もありましたが、忌憚のないご意見を拝聴したいとの思いから、提案してみました。

おおむね、面白がって頂けたようです。

- ・題名から予想した内容と全く違っていた。
- ・韓国人の物の考え方、感情の動き方がわかった。
- ・どう結末にもっていくのか興味津々だった。
- ・名前が覚えられない、名前だけでは男か女かもわからず、読むのが大変だった。
- ・格差の大きい社会が描かれている。
- ・時系列に矛盾した部分がある。
- ・とても感動的な考えを老教授から教えられた。
- ・主要人物としてもっと描かれるのかと思っていたら、一回現れたきり、二度と登場しなかった人がいる。
- ・独特の語り口で、どう受け取ったらいいのか。笑うしかないところも。
- ・結末まで来ても解決していない問題がある。
- ・登場人物を他の人物との対比のために駒のように用いているのではないか。

などのご意見を頂きました。

実際に韓国の方と接しておられる方も何人かいらして、日本人に比べて、とても感情の動きが大きいということをご指摘くださいました。また、美容や整形の話題も出ました。

とても楽しい時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。

○P.S.こちらもおすすめ

作中、ハン・スンジョの章に出てくる白いテリア犬「テイ」の名前の由来と思われる作家ジョセフィン・テイの代表作「時の娘」(ハヤカワ・ミステリ文庫で手に入ります)を。

イギリス史上最大の悪人とされる国王リチャード三世は本当に王位のために幼い甥たちを殺したのか？ 安楽椅子探偵物の傑作です。歴史好きの方にも是非。